

---

## 国際語用論会議参加の記

武内道子

第7回国際語用論学会が、2000年7月9日から14日まで Hungry の Budapest で開催された。今回の特別テーマは、Cognition in Language Use: The role of perception and representation, memory and planning, and metalinguistic awareness であった。いつものように特別テーマに基づく全体会議と研究発表、特別テーマ以外のトピックのポスターセッション、語用論に関係するどのトピックでもよいパネルセッションから成り立っていた。

登録参加者はおよそ950名、当日参加者を加えると優に、1,000名を超えた。全体会議の講演者は第6回 Reims (France) 大会より2件少なく、7名であった。テーマに関する講演は35件あり、パネルディスカッションはこれまででもっとも多く、59件あり、テーマからはずれた研究発表はポスターセッションとしてジャンルごとに130件あまり発表された。

私はパネルディスカッションの一つ “Conceptual contours at the semantic-pragmatic interface” に12人のパネラーと共に発表した。4つのパートに別れて、のべ6時間のパネルであった。会議の成果として、発表論文の中から選ばれたも

のが2巻の Proceedings になって発刊されることになっている。われわれのパネルはオーガナイザーによって編集され、*Journal of Pragmatics* の特集号として刊行されることになった。

語用論とはことばの情報伝達上の機能と言葉の使用の場面を直視し、人間の普遍的なコミュニケーションを可能にする原理を探求するものである。国際語用論学会は、もっとも学際的な意味で、言葉とコミュニケーションを認知的、社会的、および文化的視点から捉える学会として、1986年にベルギーのアントワープ大学で設立された。学会設立以前に開かれた第1回を含め、2年に1回開かれている。現在会員数は60カ国から、1,800名を超えている。

建国1,000年を迎えた Hungary は、西と東の接点として、東欧諸国の近代化の先鋒として、ミレニアム学会にふさわしいところであった。ゆったりと悠久の時を刻んできたドナウ川を挟んで、古さと新しさが交錯する Budapest の街で、古代ローマ人になったような錯覚さえ覚えながら、議論を戦わす不思議な充実感を味わった。